



カリタス女子短期大学 言語文化学科 仏語・仏語圏文化専攻
Vol. 創刊号

Liaisons 創刊号によせて

仏語・仏語圏文化専攻 主任 北垣 潔

昨年 8 月「創刊準備号」を皆様のお手元にお届けしてからはや 6 ヶ月、正式な誌名を冠して、ここに漸く「創刊号」を発刊する運びとなった。先ずは我々の怠惰による遅延を恥じると同時に、早々と寄稿していただいた卒業生の方々には、衷心よりお詫びを申し上げなければならない。

さて、既に情報誌そのものの方向性は、「創刊準備号」の一文に示されているから、ここで私が贅言を費やす必要もない。となれば、話は自然別の方向へと向くことになる。ここでは、情報誌タイトルに選んだ *Liaisons* なる言葉の周りをうろうろと、とりとめもなく散策して、「創刊号・巻頭言」執筆という私の責務を果たしたいと考える。

“liaison”とは言うまでもなく「関係」である。ざっと目を通していただければすぐにお判りいただけることだが、本誌は、シャンソン、料理、パリ、地方、民話などなど、ジャンルを問わず時代を問わず、フランス、フランス文化、フランス語を軸に文字通りそれらとなりがしかの「関係」を築いている人たちから寄せられた、現在進行形でのささやかな報告集の趣がある。特に執筆をしてくださる卒業生について言えば、一度も面識のない人たちが、同じ紙面で偶然に隣り合わせになるのだから、この偶然が何をもたらすかは定かではないものの、案外予期せぬ「関係」が形を成すということがあるかもしれない。

“liaison”はまた、「二つの連続する語を、最初の語の末尾の子音と後ろに来る語の語頭の母音を繋げて発音する」フランス語の発音上の決まりであることは今更言うまでもないだろう。もともと発音されない子音が、後ろの母音と出会うことで生まれる新たな「関係」というわけだが、そこからは、あのフランス語独特の音の響きの美しさが生まれ出てくる。この *Liaisons* でも、異なる主題が響き合い、一見して隠れていた主題と主題との「関係」がそこに浮かび上がって、新たな知の広がりを提供してくれるかもしれない。

“liaison”はしかし、単なる人と人との、事物と事物とのつながりの謂ではない。手元のプチ・ロペールを繻くと、「Ce qui relie logiquement les elements du discours 言説の諸要素を論理的に結びつけるもの」あるいは「Rapport logique, psychologique 論理的、心理的な関係」とある。前者を一言で言えば「脈絡」とでもなるのだ

ろうか。とにかくここに創刊する *Liaisons* の内容も、種々雑多な主題が響きあう、バロック的なおもしろさを備えながら、その名に恥じぬよう、編集の方針には必ず、論理的な一貫性が求められなければならないことは言うまでもない。

“*Liaisons*”本誌を手にした、フランス語を習いたての学生がいる。彼女はこんなことをつぶやいている。「li は普通に“リ”、ai は二重母音だから“エ”と読んで、次の s は母音に挟まれているから、ザ行で発音する。最後の on は口をまん丸にして鼻に抜ける感じで思いっきり“オン”と読めばいいのね。最後の s は複数だから読まない、と。つなげると“リ・エ・ゾン”でいいはずよね。」彼女は今、発音のロジックを頭で反芻しながら、自分なりのフランス語との「関係」を築きつつある。フランス語を、フランス文化を、あるいはフランス人そのものを取り巻く深淵なる論理の網の目にはまだ気づかないながらも、次第に「リ・エ・ゾン」という音が、具体的な形を持った liaison (関係) へ、さらには liaisons (諸々の関係) へと発展して行くことになるだろう。

ことほど左様に世の中は、これ「関係」なくしては成り立たない。時としてそれは「危険な関係」であったり、「うんざりするような関係」であったりもするが、これとうまく折り合いをつければ、前向きな、創造的な、はっとするような、詰まるところ素敵な「関係」を築けること必定である。この情報誌も、そんな「関係」を提供する場としてあるのだが、編集に携わる者たちのそんな思いを、紙面から汲み取っていただければと願うばかりである。

最後に、「創刊準備号」と「創刊号」双方の編集、デザインのみならず、その他煩瑣な作業を一手に引き受けてくださったのが、卒業生の内田さんである。遅々として進まぬ作業にいやな顔一つ見せず、てきばきと仕事を進めてくださった。ここに末尾ながら、深甚なる感謝の意を捧げたい。

カリタス女子短期大学卒業生の活躍

木戸口美香

カリタス女子短期大学 仏語科 1995 年卒

「サンニコラの話」

私は 99 年 1 月から航空会社勤務の夫、5 才の娘とブリュッセルに住んでいます。ベルギーの子供達にとって一年で一番楽しみな日はクリスマスではなく、12 月 6 日の「サンニコラの日」。大人も子供もサンニコラが大好きです。サンニコラは、オランダ語で「シントクロース」といい、これがアメリカに伝わりサンタクロースが誕生したと言われています。主にベルギー、オランダ、ドイツにサ

ンニコラはやって来ようです。当日、サンニコラは幼稚園や小学校にもやって来ます。

我が家の娘、晏(あん)が通う幼稚園でも例年、サンニコラを迎える準備で大忙しで Venez, venez, Saint-Nicolas と歌を練習したり、工作をしたり、当日に向け、日々気合が入っていきます。



さて、我が家のサンニコラの一日をご紹介します。当日の朝、玄関の前にサンニコラのクッキーが！(管理人さんの演出！幼稚園では娘が工作した袋の中にサンニコラ本人からぬいぐるみとお菓子いっぱいプレゼント！これでおわりとおもったら、まだまだ...今度は家の呼び鈴がなり、お向かいのご夫婦が山盛りのお菓子とサンニコラの杖をかたどったお菓子を手に、「さっきサンニコラが来てねー、ANN に渡してって置いていったのよー！」と。夜になると娘は玄関(本来は煙突の前)の前にサンニコラ用にお酒を、お供のロバに人参を用意して眠ります。朝になると娘がお願いしたプレゼントに変わっているのです。娘のためにステキな演出をしてくださる方々へ感謝すると同時に、ベルギーではそれだけ伝統的な風習なのだなと実感しました。さらに 25 日にはサンタもやって来るベルギー。子どもたちにとってはまさに VIVE LA BELGIQUE! なのです。

カリタス女子短期大学卒業生の活躍

松平美咲

カリタス女子短期大学 仏語科 1995 年卒

「カリタスでの 2 年間」

現在私はフランス人の夫とノルマンディー地方、ル・アーブルの近くで暮らしています。在仏約 2 年になりますが、去年 1 年間ル・アーブル大学の外国人対象の 1 年間のフランス語プログラムを終えた後、新たに大学に入学し、現在地理学専攻の学生として勉学に明け暮れる日々を送っています。

日本で仕事をしていた夫が帰国することになり、一緒に人生を過ごしていくことを決め、渡仏することを決めました。まだまだフランス語力が十分ではないので、もっと勉強しようと思い、こちらの学歴をとって将来の仕事探しに活かしたいと考えています。

カリタス時代はたまプラーザにある学生寮に入っていて、そこで自立の準備をしました。在学中私は b クラスに所属していましたが、しっかりとフランス語の基礎を 1 から身につけるだけでなく、文化・文学等さまざまな方向からアプローチができ、単にフランス映画が好きで始まったフランス語に対する興味がさらに深まっていま

した。カリタスでの 2 年間は自分という存在を理解し、自信をつけ、物事に対する視点の広がりや培っていくためのターニングポイントでもあったと思います。これはおそらく卒業生の誰もが感じる事なのかもしれませんが、アットホームな空気が流れていて、各先生方との距離も近く、勉強の大変さはもちろんあってもそれを楽しめる雰囲気があったように思います。

卒業後はホテル勤務を経た後、学生時代から抱いていた「演劇界で働きたい」という思いを叶え、舞台照明会社へ転職しました。それにはラシーヌやモリエールといった劇作家に触れた事が一つの大きなきっかけでしたし、現在の状況があるのもカリタスで過ごした 2 年間があればこそで、今でもその時間の貴重さをひしひしと実感しています。

フランスの魔法民話

Contes de fées français

Hitoe HIGUCHI

「シンデレラ」(フランス語ではサンドリオン)はだれでも知っている有名なお話です。でもこの話の作者がフランスの 17 世紀のシャルル・ペローだということは案外知られていないようです。ドイツのグリムの代表作だと思っている人もいますし、最近の子どもたちはディズニーのアニメだと思っているかもしれません。

どの話も細かい点にはちがいはありますが、「気だてがよく美しい娘が、実母の死後継母と義理の姉妹にいじめられ、つらい目にあうが、妖精の魔法のおかげで美しい変身をとげ、最後は王子と幸福に結ばれる」というストーリーは同じです。

この話は幼い少女たちの夢を誘い、完璧なハッピーエンドが安心感を与えてくれます。昔からこの話が世界中のおとぎ話の中で圧倒的な人気を保っているのはなんととっても超自然的な妖精の魔法のせいではないでしょうか。

実際妖精が登場してサンドリオンを舞踏会に行かせるために次々と魔法をかける場面は圧巻です。平凡な読者の少女はこうして自分までも魔法にかけられ、胸をときめかせて舞踏会に出席するのです。この魔法のかけかたもなかなか合理的で、巧みにこじつけられています。たとえば、黄色いかぼちゃの中身をくりぬいて金色の馬車に、はつかねずみは白いまだらのはいったきれいな馬に、ひげをはやした大きなねずみはみごとな口ひげをはやした太った御者に、そしてとかげは飾りをいっぱいつけた服を着た従僕に変えられます。これらはすべて魔法の棒の一振りによって行われるのです。サンドリオンも妖精に積極的に協力し、自分からすすんでねずみとりにねずみがかかっているかどうか見にいけます。

妖精の魔法の中で特に魅力的なのはサンドリオンにガラスの靴をはかせたことでしょう。(グリムのお話ではししゅうをほどこした金の靴で、もっと古いフランスのお話になるとくつの中にはふれていない場合もあります。)



ペローのお話の中にはこうした魔法がいたるところで見られます。たとえば「親指小僧」では一步步くと七里進むあの有名な「七里靴」がでてきます。これはもとは人食いのものでしたが、親指小僧がその靴をはくと、魔法がかかっているのではく人の足に合うように大きくなったり小さくなったりすることができるのです。親指小僧はこの靴をはいて、王様に遠くで行われている戦争の様子を知らせ、ほうびに大金をもらいます。

また「仙女」(これは妖精と同じ意味です)というお話では泉のほとりにいたみずぼらしいおばあさんが実は魔法使いで、親切に水をのませてくれたやさしい娘にはお礼として一言しゃべるごとに口から花や宝石がとびだす



ようにし、高慢で不作法な娘にはおくりものとして口からへびやひきがえるがでてくるようにしてしまいます。ペローはダイヤモンドや金貨よりもやさしい言葉のほうに力があり、値打ちがあるということをおしやめたかったのしょう。

こうした魔法民話が子どもたちだけでなく大人の心もしっかりとらえるのは、魔法の力にみんながあこがれの気持ちを持っているからにちがいありません。

(樋口仁枝・本学教授)

パサージュ()

Passages

Nobuko INABA

本誌「liaisons」の読者の皆さまは、パリに赴いたことのある方が多いことでしょう。あるいは今まさにパリ行きを夢見て計画をたてている方もいらっしゃるでしょう。

パリの見どころはガイドブックに任せるとして、私は皆さまにパサージュめぐりをお薦めいたします。パサージュの中に入り200年の歴史に思いをはせ、その切り取ら

れた時空間に身をおいてほしいものです。

さて、パサージュとは何でしょうか。単なるショッピングアーケードではありません。「都市に見られる両側に商店が並んだガラス屋根で被われた歩行者専用の抜け道」をいいます。



19世紀のナポレオン 世 **パサージュ・デ・パノラマ** からナポレオン 世の時代に次々と作られたものです。デパート誕生以前の繁華街であり流行の発信地でした。

ガス灯が初めて点ったのもこのパサージュ・デ・パノラマです。一般にパサージュには劇場やミュージアムが隣接し、花屋、サロン・ド・テ、美容院、ブティック、装飾品店などが並び、女性は昔から入ったらなかなか出られないかもしれせん。



本来は「抜け道」なのですから、通りぬける近道であるのに、一旦入ってしまうとそのまま何時間もという経験をする方も多いのです。

パサージュ・ジュフロワ 日曜日の散歩

ここまでお読みになり、「パサージュならパレロワイアルが元祖でしょ」と思った方は歴史通ですし、「ギャリ・ヴィヴィエヌでお茶をしたい」と呟いた方はお洒落さんでしょう。あるいは映画「シャレード」や「地下鉄のザジ」を思い出したひとは、かなりの映画好きです。エミール・ゾラの『ナナ』やルイ＝フェルディナン・セリーヌの『なしくずしの死』を思う方は、フランス文学に浸っている読書好きでしょう。

これらのパサージュは、成立年代や地域によって分類することができます。ただ全盛期120も在ったといわれるパサージュも時代とともに忘れられ朽ち果てたパサージュや、ナポレオン 世時代の知事オスマン男爵が実施したいわゆるオスマニゼーションという区画整理で



失われたパサージュも多く、今日 **パサージュ・ヴェルド** 迎えられるパサージュは、おおよそ25くらいでしょう。

今回はパサージュ・デ・パノラマ、パサージュ・ジュフロワ、パサージュ・ヴェルドと三つの連続して散歩できるパサージュを御案内しましょう。

(稲葉延子・本学教授)

Q:社会人学生として入学されていかがですか？

藤澤さん:もうすっかり慣れて楽しく過ごしています。

岸さん:私も若い学生たちと一緒に充実した学生生活を送っています。

Q:入学される前は何か不安はありませんでしたか。

藤澤さん:私は通学時間もかかりますので体力的に少し心配でした。でも、今は慣れまして、電車内の時間を有効に使っています。

岸さん:私は正直言って学力が心配でした。授業についていけるかどうか不安でしたが、幸い少人数で先生方も丁寧に指導していただきますので、不安はすぐ解消されました。カリタスのように少人数でなかったらとてもこんなふうにはいかなかったと思います。

仏語・仏語圏文化専攻
1年在学
藤澤紀美子さん



仏語・仏語圏文化専攻
2年在学
岸光子さん

Q:勉強以外の学生生活はいかがですか。

藤澤さん:私は行事が楽しそうに見えたので積極的に参加しました。スポーツデーも学園祭も皆と一緒に楽しみました。

岸さん:行事というものは自由参加ではなくて出るべきもの、と思っていますから全て参加しています。若い学生たちは仲良くなるにつれて、礼儀正しく接してくれるようになり、嬉しく思っています。大変だと思ふときもありますが、皆でやるから勢いでできることもたくさんあって有難いと思います。

Q:カリタスで勉強しようと思ったきっかけは何ですか？

またこれから入ってくる社会人学生に一言アドバイスをお願いします。

藤澤さん:私はフランス語のラジオ講座のテキストの広告を見て自分にあっている学校だと思い、志願しました。

仏検 2 級取得を目指し、卒業後は編入学を考えています。忙しいですが、目標を持って生きると生活に張りがあります。また単位は必修の他は自分が興味を持てるものをとることをお勧めします。楽しく勉強できますから。

岸さん:ともかく勉強したいと思ったら思い切ってはじめたらいいと思います。私はカリタスで行なわれた市民講座を受講してとてもいい雰囲気だったので、それまで独学でフランス語を勉強していましたが、入学を決めました。案ずるより産むが安いです。アットホームな雰囲気先生方も気さくですし、中には社会人なので気をつけてくださる先生もいらっしゃいます。卒業後のことはまだ決めていませんが、今は一日一日を大切に過ごすように心がけています。

カリタス女子短期大学

言語文化学科 仏語・仏語圏文化専攻

〒225-0011 横浜市青葉区あざみ野 2-29-1

TEL: 045-901-5133 FAX: 045-901-5066

URL: <http://www.caritas.ac.jp/france/>

MAIL: inaba@caritas.ac.jp

kitagaki@caritas.ac.jp

Liaisons フランコフィルのための情報誌

2005.3. 発行

発行人: 北垣 潔(仏語・仏語圏文化専攻 主任)

編集人: 樋口仁枝 編集協力: 内田香織

Liaisons という誌名は卒業生の小森由香さんのアイデアを採用しました。